

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第142号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成17年12月21日

ハチクマ



2005. 9. 19 室蘭市測量山

撮影者 島田芳郎(札幌市北区)



も く じ

| | | |
|----------------------------|-------------------|----|
| 岡田幹夫探鳥幹事代表を悼む | 小堀 煌治 | 2 |
| 礼文島におけるブッポウソウの観察 | | |
| | 江別市文京台 富川 徹 | 3 |
| 余市海岸線の野鳥 | 余市町 神田 健男 | 5 |
| 何でだろう！ 札幌市中心部・豊平川にオオセグロカモメ | | |
| | 札幌市豊平区 戸津 高保 | 6 |
| 鳥が“くすり”に | 当別町 道川富美子 | 9 |
| 私の鳥見ライフ | 札幌市西区 安 真一郎 | 11 |
| — 新聞情報から — | | |
| | 帯広川にナキハクチョウ 広 報 部 | 13 |
| 探鳥会ほうこく | | 14 |
| 探鳥会あんない | | 16 |
| 鳥 民 だ よ り | | 16 |

岡田幹夫探鳥幹事代表を悼む 会 長 小 堀 煌 治

岡田さんの訃報に耳を疑いました。そのつい2週間前(9月11日)、野幌の探鳥幹事を担当しましたが、その前夜、責任者の岡田さんが忘れっぽい私を心配して確認の電話をくれ、当日も顔を出してくれました。ネームプレートは間に合っているか、チェックリストは足りるか、いつもの温顔で面倒を見てくれていました。体が少し不自由になった井上顧問に寄り添い、いつもの第一休憩所まで親しげに話をしながら歩いていた。そんな岡田さんが突然逝ってしまいました。野鳥愛護会の古い同士の一人を失ってしまいました。呆然としています。

岡田さんは野鳥愛護会が設立された昭和45年には道庁の林務部・林政課に勤務していて若手の職員として「北海道野鳥愛護会」設立の準備をし、推進するために一生懸命でした。私も若手の会員として末席を汚していましたが、当時は「日本野鳥の会」の札幌支部も無くて、野鳥愛護会が北海道に散在する野鳥関係者や組織をまとめ情報を共有するための初めての組織でした。産学官の野鳥関係者、民間の鳥好きや研究者が一同に会して設立されました。役員、幹事には錚々たる人達が顔を揃え副会長が4人もいました。たまに幹事会を開くと丁々発止、なかなか会議が終わらずうんざりしたものでしたが、最後は道庁の谷口さん(前会長)や岡田さんなどが何とか、まとめてくれました。そんな状態で当時の野鳥愛護会は自立した状態とは言えず、岡田さんをはじめ道庁の林務部・林政課の人達が陰で支えていました。

その後、岡田さんは留萌支庁、後志支庁、十勝支庁へ転勤し会の活動から一時遠ざかっていましたが、谷口さんが会長になった時に幹事として復帰し、その後はご存知のように探鳥幹事の責任者としていつもニコニコ、親切に探鳥会の面倒をみてくれました。探鳥会は常に二人の幹事が担当しますが、担当幹事が所用で都合が悪くなると事前に岡田さんに連絡します。岡田さんが代わりの人を手配します

が岡田さんの依頼ならよほどの事が無い限り断る人はいません。お陰で探鳥会は一度も休むことなく続けることができました。岡田さんの後をカバーするのは大変ですが皆で協力して何とかしなければなりません。

岡田さんは温厚で篤実、これは万人が認めるところでしよう。しかし、岡田さんは別の顔も持っていました。若き日の岡田さんは前述のように、会議がもめると毅然と発言して会をまとめてくれました。また愛護会の30周年記念事業として記念誌「私たちの探鳥会」の発行を企画した時でした。会の予算は乏しく財団法人や企業の助成金をあてにして計画を進めていました。どこか一つくらいは助成してくれるだろうと安易に考えて色々な所に助成申請書を出しましたが全部ダメでした。編集委員は意気消沈、さて、どうするか悩んでいました。この時岡田さんが素早く対応してくれました。「前田一步園財団」の助成ならギリギリ間に合うという、情報をつかんでくれ、同財団に話を通して編集委員は息を吹き返しました。急遽FAXで申請書を請求し、FAXで申請書を出し、何とか助成を受けることができました。岡田さんの有能な行政マンとしての一面を見たように思いました。

突然の事で葬儀にも参加できず本当に残念でしたが、先日、戸津副会長と岡田宅を訪れてお参りさせてもらいました。ご家族の顔を見るのも辛かったのですが、奥様が冷静に対応してくれたので気が楽になり思い出話で故人を偲んで帰ってきました。岡田さんは旭川で屋根にペンキを塗っていて不慮の事故に合われたそうです。奥さんとの色々な話の中で岡田さんはご家族にも慕われて頼りにされていたことを強く感じました。息子さんが葬儀参列者への挨拶で「親父が復活したら、高い所へ登るときはヘルメットと命綱を必ず付けろ、と叱ってやる」と話したそうです。ご家族の無念の気持ちが痛切に伝わってきます。我々北海道野鳥愛護会の会員も本当に残念です。

礼文島におけるブッポウソウの観察

江別市文京台 富川 徹

はじめに

「ブッポウ〜ソウ!?!」と鳴くのはコノハズク。姿のブッポウソウは、青色の金属光沢をもつ綺麗な鳥で、その魅力的な鳥を「町・村の鳥」とする町村もみられる。

我が国でのブッポウソウは、環境省のレッドデータブック(2002)の絶滅危惧Ⅱ類(VU))となっている。本種は、夏鳥として本州、四国、九州に渡来し繁殖するが、営巣に適する樹洞の減少および社寺林周辺の開発などによる生息環境の悪化から生息数の減少傾向にある。生息分布は、ヒマラヤから中国東北地方、アムール地方、朝鮮半島、日本であり、北海道でも道東の渡来記録が知られるが、近年では記録のなかった礼文島、利尻島、天売島などの離島のほか内地でも記録されている。

著者は、今年(2005年)の春、礼文島において本種を観察すると同時に写真撮影に成功した。一方、詳細は不明ではあるが、同時期にかけて道北の北緯45度付近をはじめ、ニセコ周辺、登別周辺の地域でも写真撮影される確実な情報を得ることができ、この春はブッポウソウの当たり年だったといえよう(図1)。

ここでは、礼文島におけるブッポウソウの観察状況と若干の考察について触れたい。

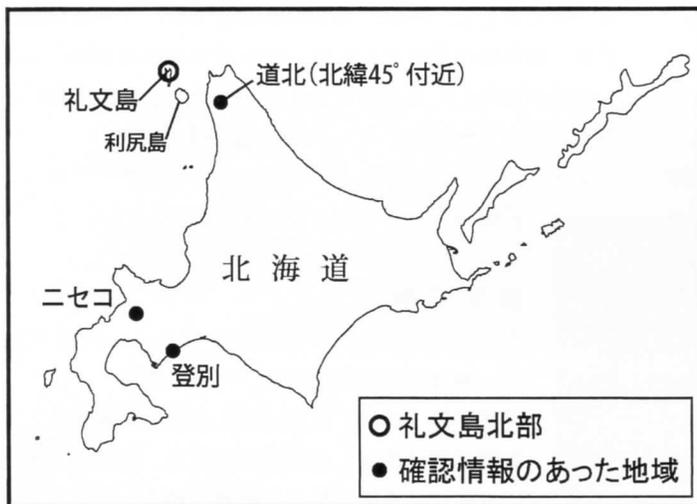


図1 2005年春のブッポウソウ記録地域

ブッポウソウの観察

ブッポウソウの確認は、5月27日と28日の2日である。確認の場所は、礼文島北部の沢地でミズバショウやザゼンソウの生育する湿地とオノエヤナギなどの低い広葉樹からなる環境であった。

ブッポウソウは、両日ともに2羽(雌雄年齢不明)を確認した。観察時間は、いずれも朝8時過ぎからで、27日は午後3時頃まで、28日は午後1時頃までであり、そのうちの1羽については比較的長時間に至る観察と写真撮影が行えた。午前中は補食行動が主であり、午後からは飛翔移動する姿をたまにみかける程度で、木陰で休息する様子も観察した。



枝にとまるブッポウソウ

補食行動は、大半が樹間を飛び回り空中で昆虫を捕らえる行動が顕著であった。すなわち、この時期に多数発生するハエの仲間のケバエ(*Bibionidae*)などをフライキャッチしては、比較的目立つ枯れ枝や折れた樹幹にとまるといった動作が繰り返し行われた。この時の飛翔範囲は比較的狭く、飛び方も直線的、上下左右に加え、反転、急降下といった目立つ飛行技術は誠に見事というものであり、また、頑丈な赤い口(嘴)を大きく開き獲物をとらえる動作は大胆かつ滑稽にもみえた。飛行については極めてスムーズで優雅さを感じた。また、止まり場所は、補食および休息時ともに枯れ木や樹木の枝先などに執着していたことが観察からうかがわれた。希にオオイタドリなどの低い草枝や地上にも降りることもあったが、地上での具体的な補食行動は観察されなかった。

ブッポウソウの餌は、一般に雛への餌運びを含めて昆虫が主とされ、トンボ、セミ、クワガタなど様々である。しかし、今回観察したブッポウソウの餌のとり方をみると、中村(2004)にある「見通しのよい場所にとまり、飛んでいる虫を見つけ飛び立ち、空中で虫を嘴でとらえる(フライキャッチ)」方式そのものであった。繁殖期における雛への餌運びの必要もないことから、自ら食べる



フライキャッチするブッポウソウ

ことに専念し、本来の主食である水辺から羽化し空中を飛び回る小さな虫を餌としていたものと考えられる。

なお、観察中におけるブッポウソウの鳴き声としては、27日に2羽が飛び交う時に一度「ゲツ」と小さく聞こえたのみで、その他ではいっさい聞かれなかった。また、観察後の5月29日～6月3日および7月3日～6日には確認されなかったことから、当該地での繁殖はないと判断した。

渡りと分布に思うこと

この春のブッポウソウは、今回の確認地外の地域でも観察されている可能性が考えられるが、いずれにしてもどこからきてどこに行ったのかが大変気になるところである。

著者は、1994年から礼文島において鳥類標識調査を行っており、同時に観察も行っている。ブッポウソウは今回が初めての記録であるが、これまでの記録にはウスリー地方などの大陸に生息分布すると考えられるセジロタヒバリ、シロハラホオジロ、コイカルなどを標識放鳥しており、アカアシチョウゲンボウ、ヤツガシラ、ムギマキなどを観察している（富川未発表資料）。また、隣接する利尻島でも、中国で放鳥されたミヤマホオジロが利尻でリカバリー（再



地上におりるブッポウソウ

捕獲）されるという記録があるほか、アカガシラサギ、マミジロキビタキ、ルリガラなどの多くの鳥が観察されている。

このように、礼文・利尻の両島は我が国最北の島嶼であり、大陸にも近い地理的条件を有していることから、北方域の鳥の渡りに関して密接に関係の深いことが示唆される。

ブッポウソウの渡りや分布等の詳細な文献や資料は少なく、今回の礼文島をはじめとする道内各地への渡来結果は推測にはなるが、ウスリー地方などの繁殖地への北上移動の際に北海道内を通過していた可能性が考えられる。本種をはじめとする多くの鳥の渡りや飛翔能力という謎についてはいつも驚かされるばかりであるが、今後は今回のような観察記録の収集・整理等のデータの充実性をさらに発展させることや、とくに渡りに注目した各種調査が検討されていく必要があるだろう。

カ・ア・ヴォロビョフ（1977）によると、ブッポウソウはウスリー地方で最も特徴的な鳥で、分布では北緯45度（シーチャ河）までみられ、礼文島とほぼ同緯度となるハンカ湖北側のイマン河付近では極めて普通とされている。営巣は森林で、クマゲラやオオアカゲラの古い樹穴を利用するので、キツツキ類のいることが本種の営巣する環境条件とされている。そうすると、単純に考えても本種は北海道のどこでみられても不思議ではないことになる。

ブッポウソウの減少は営巣にふさわしい樹洞のある樹木の減少とも言われ、今や本州の繁殖地では巣箱かけなどの保護活動が積極的に行われている。近い将来に美しい姿の鳥が飛び交う地域の増えることを願うにはいられないものの、もしかして、キツツキ王国北海道でも、豊かな自然と営巣・餌環境が維持されれば、ブッポウソウの普通にみられる日が実現し、またひとつ「町・村の鳥」にする町村が誕生するかもしれない・・・、と思ったりもする。

最後に、今回ブッポウソウの確認情報を提供くださった皆様方にここからお礼申し上げます。

参考文献

- カ・ア・ヴォロビョフ（1977）ウスリーの鳥（上）
—野鳥の生態と分布—。たらら書房
- 清棲幸保（1978）日本鳥類大図鑑Ⅱ。講談社
- 寺沢孝毅（2000）北海道島の野鳥。北海道新聞社
- 環境省自然環境局野生生物課（2002）改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 —レッドデータブック—
- 中村浩志（2004）甦れ、ブッポウソウ。山と溪谷社

余市海岸線の野鳥

余市町 神田 健男

国道5号線を積丹方面に向かい、小樽市蘭島のフゴッペトンネルを抜けると余市です。右手に広がる海岸が大浜中、その後ろにはシリバ岬、シリバ岬の手前が余市港です。

余市港と余市マリーナ

余市港、ここは古くからの漁港です。今でもたくさんの漁船が出入りし、またいつも釣りを楽しんでいる人がいます。冬になるとシノリガモを間近に見ることができるので時々でかけています。双眼鏡がなくてもいいほど近くで見ることができます。数をカウントしたことはありませんが、思わず「たくさんいるなあ」という言葉がでるほどです。シノリガモの美しい羽模様をじっくり見たい人はぜひ出かけてみてください。時々、ウミアイサ、ウミウ、ヒメウ、稀にウミスズメなども顔を見せてくれます。1988年12月にはただ一度だけですがエトロフウミスズメを観察しました。このときは確か日本海が大荒れだったと記憶しています。漁港に避難してきたのかも知れません。

漁船が帰って来たときは、おこぼれを狙ってカモメが集まって来ます。セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメなどの1年目、2年目・・・成鳥まで近くでじっくり観察できます。人慣れしているので、漁港内を車で移動するときはカモメたちを踏みつぶさないように注意してください。古平・美国方面行きのバスに乗れば、「水産試験場前」で降りて徒歩10分程度です。

漁港から1kmほど東の余市川の河口には新設されたマリーナがあり、ここはレジャー用のボートと漁船が出入りしています。冬、余市港からの帰りに立ち寄っています。ハジロカイツブリ、クロガモ、ヒドリガモ、ホオジロガモ、ホシハジロなどが観察できます。いずれも個体数は多くありません。全くハズレの日もありますが、運が良ければマリーナの背にある断崖の上の木にオジロワシを発見することもあります。西側の浜中の護岸ブロックの内側では真冬にマガモの大群に出会うことがたびたびあります。



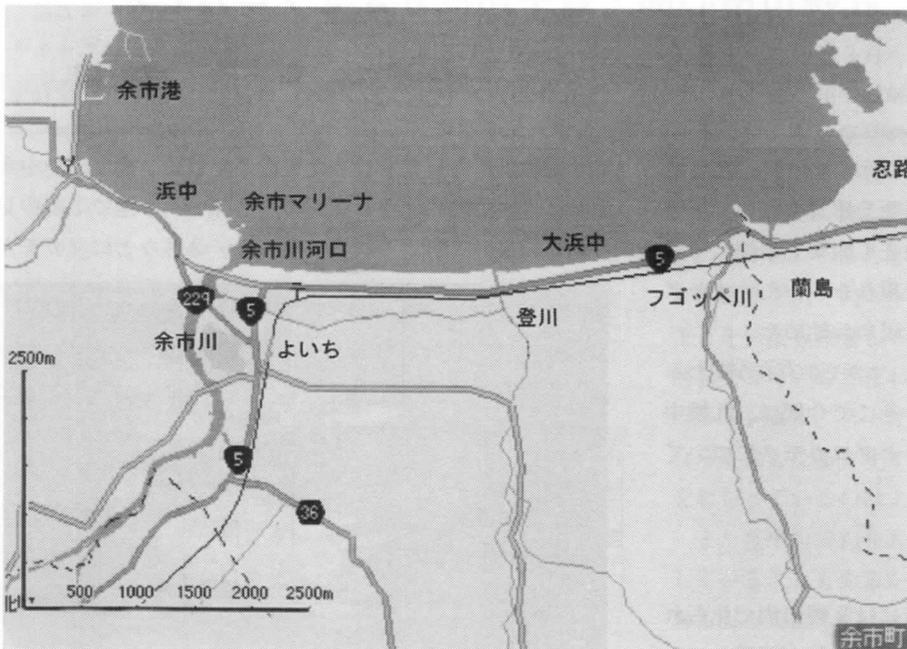
エトロフウミスズメ 1988年12月25日 余市港

大浜中

春から秋にかけては大浜中。余市の海岸線は古くはずつと砂浜が続いていたそうです。今はその一部が残っているだけです、数km続く大浜中にはその名残があります。

町の人たち息抜きの場所にもなっているようで、犬の散歩やゴルフの練習をしている人もいます。真夏は海水浴場になり、キャンプをする人たちが賑わいます。

野鳥観察にはやはり早朝が一番。砂浜なので、シギ・チドリが多く飛来します。記憶をたどるためにフィールドノートを開いてみました。波打ち際で餌を探すのはトウネン、ハマシギ、ミユビシギ、メダイチドリ、ヘラシギなど（一



余市海岸線地図

度に見られるわけではありません念のため)、護岸ブロックの上にはキアシシギ、砂の上を大股で歩くホウロクシギ、チュウシャクシギ、あまり人を恐れないオオソリハシギ、水浴びするソリハシギ、草地で採餌していたオバシギ、太い流木のかげに身を隠しているダイゼン、上空のハヤブサ、ミサゴ、登川の上流から河口へ餌採りに来るカワセミなど。いずれも個体数は多くはありません。むしろ少ないと言ったほうが妥当かも知れません。鳥の姿がまったく見えない日も数多くありますが、そのような日はすぐ近くにあるラーメン列車まで余市のラーメンを食べに行ってみてください。ジャンボ餃子も評判です。

しかし何度も足を運べば楽しい出会いもあります。最近の記録から拾ってみました。1999年4月オオチドリ、クロジョウビタキ、1998年10月ミヤコドリ、また、1995年5月



オオチドリ 1999年4月11日 大浜中



ミヤコドリ 1998年10月3日 大浜中

にはツバメチドリも観察されています。このときは残念ながら見る事が出来ませんでした。

以前はオオルリ、キビタキ、カワセミなど、美しく、絵になる鳥が好きでしたが、この大浜中を歩くようになってから、シギ・チドリの観察も楽しくなってきました。

バス停は、小樽に近い方から、「フゴッペ洞窟前」、「東大浜中」、「大浜中」があります。いずれも海岸線に出ることが出来ますが、建物などがなく気兼ねなく行ける「大浜中」で降りることをおすすめします。運悪く雨に降られたら、浜沿いにある「鶴亀温泉」につかってゆっくり温まってください。

なお、この原稿を書くにあたって、余市町在住の日本野鳥の会小樽支部の山田忠重さんより野鳥情報をたくさんいただきました。ありがとうございました。

何でだろう！ 札幌市中心部・豊平川にオオセグロカモメ

札幌市豊平区 戸津高保

私は札幌市中心部の豊平川（ミュンヘン大橋～JR苗穂鉄橋）で平成2年6月より毎月2回野鳥観察を行い、記録をとって16年目になった。そして現在も観察を続けている。この間に、平成6年までここで現れなかったオオセグロカモメが、平成7年から豊平川に現われ始めた。

オオセグロカモメの都市進出には、マガモの存在が関わっているのではないかと考えられる。そこで今回は、札幌市中心部・豊平川におけるマガモとオオセグロカモメについて書いてみたいと思う。

マガモ

本来、冬鳥であるマガモは、以前には札幌市内で見られなかった。しかし道内では山地などで、少数が繁殖していたようである。

私が豊平川の観察を始めた平成2年以降、豊平川や中島公園、月寒公園の池など札幌市中心部の川や池で1年中見られている。豊平川の観察では、1・2月などにマガモが



マガモ

見られなかった年もあるのだが(表1)、その時期に、たとえば中島公園の池や鴨々川で相当数のマガモが観察された。マガモは札幌市中心部に1年中いることは間違いないと思われる。

それでは、いつ頃からマガモが札幌市中心部の川や池に現われ、繁殖するようになったのだろうか？

昭和56年('81年)、中島公園で歩くスキーの貸し出しが始まった頃、公園内の池や鴨々川でマガモが見られ、マガモへの餌づけを付近の市民が行っていた。この頃にはマガモが札幌市内に住みついていたと考えられる。

市民によるマガモへの餌づけは、札幌市中心部にマガモが定着するようになった原因の1つなのであろう。この時期は日本が経済大国へと向い、市民の生活が徐々に豊かになってきたという背景がある。

毎年10月1日から始まる銃猟の解禁で、マガモを始めとしたカモ類は銃で撃たれるのだが、昭和52年より豊平川は銃猟禁止区域となっている。そして特に札幌市内を流れる豊平川が銃猟から安全になった事は、札幌市内にマガモが定着するようになった、もう1つの原因であろうと思われる。

昭和53年あるいは54年に、マガモが道庁の池で繁殖をしたそうである。また先日、サケ科学館の人達と話し合いをする中で、昭和50年代の初めには、札幌市内の川や池でマガモが見られたという話が出た。“札幌っ子マガモ”の出現は昭和52年('77年)頃までさかのぼるのではないかとと思われる。

現在、市内の川や池などで、マガモの雌がヒナをつれて、側にいる市民に近づいていくのを見るのだが、人に対してすっかり安心している感じがする。

市民がマガモに餌(パンくずなど)を与えている近くにオオセグロカモメが寄ってきて、そのおこぼれをもらうのが観察される(中島公園、月寒公園、北大大野池など)。またオオセグロカモメはマガモの小さなヒナをねらうこともあるようだ。

マガモがいる池などに、オオセグロカモメがよく現われることから、マガモの存在が餌に関してだけでなく、オオセグロカモメの人に対する警戒心を弱めているのではないと思われる。

オオセグロカモメ

今やオオセグロカモメは「札幌の鳥」といえる。札幌市中心部のビル街や川・池などで、ごく普通に見られるようになってきた。豊平川にかかっている南大橋と南7条橋間の中洲で、オオセグロカモメがよく集まって休んでおり、そこで20~30羽が観察される。

オオセグロカモメは、私の観察によると今から10年前の平成7年('95年)に、札幌市中心部に現われ始め、その



オオセグロカモメ

後徐々に数を増やしながらか、平成12年('00年)からは、1年中私の観察区域の豊平川で見られるようになってきた(表2)。

また、平成13年から、日本野鳥の会の足立英治氏により、札幌市中央区のビル街(立体駐車場)で、オオセグロカモメの繁殖が確認された。

それではなぜ海鳥であるオオセグロカモメが札幌市中心部・豊平川で1年中見られるようになってきたのだろうか。その理由として次の4点が考えられる。

1) 豊平川にはカモメの餌がある

豊平川では、“カムバックサーモン運動”により、昭和56年('81年)から鮭の再遡上が始まり、その後現在まで、鮭の遡上が続いている。

鮭は豊平川に9月~翌年1月まで、遡上してきて、自然産卵している。産卵は東橋から、真駒内川・豊平川合流点の間で行われる。平成15年には豊平川に1,500匹の鮭が遡上してきたそうである。

産まれた卵は3月~4月に孵化し、稚魚が海に下っている。また豊平川では毎年20万匹の鮭の稚魚が、3月~5月にかけて、自然産卵のものとは別に放流されている。

豊平川と鮭との関わりを考えると、1年のうち9ヶ月(9月から翌年の5月まで)は成魚・卵・稚魚のいずれかが、豊平川にいることになる。

私は豊平川で鮭のホッチャレを食べているオオセグロカモメを何度も観察している。また鮭の卵や稚魚もカモメの餌になっていると思われる。豊平川には鮭以外にもウグイ、フクドジョウ、スナヤツメ、ニジマスなどの魚がいて、これらも餌となる。オオセグロカモメが川の浅瀬や堰堤で魚をねらっているのはよく見かける。

また豊平川で釣り人の近くにオオセグロカモメがじっとしていることもあるが、釣れたウグイなどをもらうこともあるようだ。

オオセグロカモメは雑食性の強いカモメであり、二条市場の近くで市民が、カラスがちらかしたゴミの中から餌を

表1 マガモの出現月

| 月 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 月数 |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|-----|
| 平成2 | - | - | - | - | - | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | (7) |
| 3 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 4 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 5 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 11 |
| 6 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 10 |
| 7 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 8 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 9 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 10 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 11 |
| 11 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 12 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 10 |
| 13 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 10 |
| 14 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 10 |
| 15 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 11 |
| 16 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 9 |

表2 オオセグロカモメの出現月

| 月 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 月数 |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|-----|
| 平成2 | - | - | - | - | - | | | | | | | | (0) |
| 3 | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 4 | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 5 | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 6 | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 7 | | | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 5 |
| 8 | | | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 5 |
| 9 | ○ | ○ | | | | | ○ | | ○ | | | | 4 |
| 10 | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 8 |
| 11 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 9 |
| 12 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 13 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 14 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 15 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |
| 16 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 12 |

表1、2は札幌市中心部の豊平川（ミュンヘン大橋～JR苗穂鉄橋）の記録

取っているのを見たそうである。またマガモのところでもふれたが、市内の公園の池などで、市民がマガモに与えている餌を、カモメがもらっているのを時々見ることがある。

2) 豊平川は安全である

本来、野鳥は危険に対して非常に敏感であり、人に対しても強い警戒心を持っていると思われる。

現在はすっかり人慣れしている札幌市内のマガモの存在（市民も暖かく接している）が、人は敵ではないという点で、オオセグロカモメにも影響しているのではないかと考えられる。札幌市内のマガモがいる川や池（豊平川、中島公園・道庁・月寒公園の池など）にオオセグロカモメも良く姿を現わす。それに豊平川にはオオセグロカモメの天敵がほとんどいない。川でホッチャレを食べているオオセグロカモメから少し離れて、ハシブトガラスがそれを見ることがあった。ハシブトガラスもオオセグロカモメには一目おいていると思われる。

また冬期の札幌市内は、海岸にくらべて風が弱く、暖かいと考えられる。

3) 豊平川の近くに巣づくりをする場所がある

先にもふれたが、オオセグロカモメが平成13年より札幌市中央区のビルの屋上（立体駐車場）で繁殖を始めた。ビルの屋上はオオセグロカモメからすると、本来巣づくりをする海岸の崖と似たような環境なのだろう。平成14年には

13巢でオオセグロカモメの繁殖が前述の足立氏等によって確認されている。

ここ数年、8月後半に札幌市中心部の豊平川でオオセグロカモメの幼鳥をよく見かける。平成17年8月24日に豊平川の南22条橋と南19条橋間の浅瀬で、親と一緒にいる、あるいは幼鳥のみものを合わせて、合計7羽の幼鳥を確認した。時々親に餌をねだっている幼鳥も見られた。おそらく札幌生まれの個体であろうと思われる。

4) オオセグロカモメは全道的に増加し、分布を広げている

羽根海鳥センターの小野宏治氏の話によると、このところ天売島でも、オオセグロカモメの繁殖数が大きく増加しているそうである。札幌市中心部・豊平川への進出は、オオセグロカモメがその数を増し、分布域を広げている1つの表われではないかと考えられる。

平成17年3月、円山上空を高く飛んでいる10羽近いオオセグロカモメを観察した。オオセグロカモメが札幌市内と海岸とを行き来していることも考えられるが、この点是不明で、今後の問題である。

そして札幌市中心部・豊平川に見られるオオセグロカモメが今後どうなっていくのかは、興味あるテーマであり、私の豊平川の観察は、もうしばらく続くことになりそうである。

鳥が“くすり”に

当別町 道川 富美子

私が10年ほど前まで勤めていた薬局（生薬・漢方薬専門の薬局）の棚に、『烏霜（ウソウ）』と達筆で書かれた素焼きの土器が置かれてありました。烏霜とはカラスの黒焼きのことで、カラスを‘まるのまま’炭になるまで焼いたものです。もちろん今はお店の飾りになっているだけですが、開局が昭和初期と聞いていますので、そう昔ではない時代まで使われていたのでしょうか。和紙で封印されていたので中は見られなかったのですが、おそらく崩れた真っ黒の炭が入っているだけと思っています。

カラス

カラスの黒焼きの使い方を調べてみました。粉末にしたものを1日4g位服用とあり、効能は血の道・脳病・逆上症・神経痛など（西山英雄，漢方薬と民間薬，1975.）。聞き慣れない病名もありますが、症状は何となく想像できるかと思います。

中国で出版されている【中薬（ちゅうやく）大辞典】には5767項目の植物・動物・鉱物などの薬効、用量用法などが記載され、動物薬740項目の中には鳥類も含まれています（江蘇新医学院編，中薬大辞典，1976）。

これによりますと、ハシブトガラスの生薬名は『烏鴉（ウア）』で、おもに体が弱ったことでひき起こされた症状に対して使っています。小児のひきつけ・めまい・喘息などに肉を他の薬草などと一緒に煮て食べるとか、炒って母乳不足に用いるなど。ほんとに効くのかなと言いたくなりますが、粉末を香油で練って髪の毛の薄いところに塗るというの載っています。羽根を焼いて粉末にしたものは、血液をきれいにする働きがあるというので、打撲・破傷風など

に用いられる（た？）ようです。

余談ですが、明治11年の函館支庁民事課の記録に、カラスの足を肥料として利用したことが残っているそうです（山田伸一，北海道開拓記念館公開講座「カラスを殺すとお金がもらえた話」，2002）。

スズメ

身近で手に入るだけあってスズメはいろいろ利用されてきたようです。日本では黒焼きを脚気・喘息・心臓病・胃酸過多などに、足の黒焼き（俗に雀千足焼というそう）を風邪・百日咳に。肉の付け焼きは体を温め体力をつける働きがあって、卵も体力をつけるために食べたといった具合です。

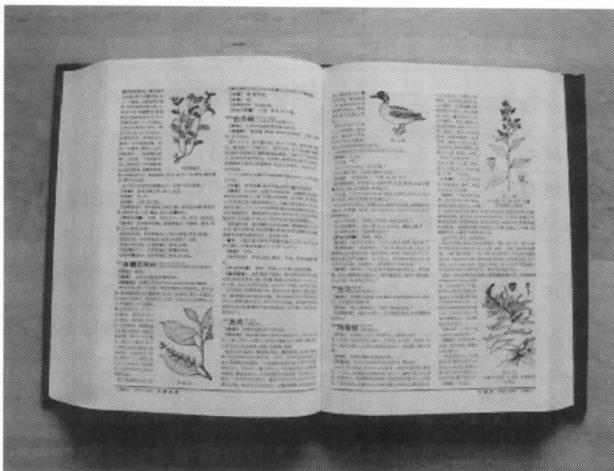
スズメの肉の生薬名は『雀（ジャク）』。中国では、とろ火で長く煮て食べる、煮詰めて膏（どろっとした状態）にする、焼いて粉末にするなどとして用いるとか。体が弱って冷える体質を改善する働きがあって、特に腰膝の冷え・頻尿などに用いるとされています。そして体がほてる体質の人はさらに熱っぽくなるので使わないようにとの注意書きがみられます。

スズメ、ニュウナイスズメの糞は、『白丁香（ハクチョウコウ）』という上品な名前を持っています。香辛料の丁香（＝丁字、クローブ）と形が似ているからだそう。雄スズメの糞の成分は灰分33.7%、総窒素量5.66%、アンモニア0.22%を含むとあります。粉末を腹部の腫瘍や冷え症に服用、綿に包み虫歯に詰めて痛み止めに、練って眼病の目薬にするなどの効能が述べられています。

またまた余談ですが、スズメの中国名は麻雀（マジャク）。糞といえば、ウグイスの糞で洗顔すると肌につやが出るという話しはご存知の方もいらっしゃるでしょう。江戸時代あたりから親しまれてきたとか。勤めていたときは単2電池ほどの大きさの小瓶入り商品があり、たまに売れていました。割に値段が高かったので自分で試していませんが。

日本の黒焼き

以前に聞いた話では、東京蔵前の（株）蛇善で割に良く売れたのは『鳶霜＝トビの黒焼き』だったそうで、今も一応1g90円と価格がついています（電話で問い合わせたところ在庫はほとんどないとのこと）。粉末1日10g位を神経衰弱・脳病・めまい・喘息・脚気・黄疸などに服用。また、トビの肉をてんかん（発作的に痙攣や意識喪失などを起こす疾患）に食べたそうです。



中薬大辞典 マガモの項

表1 薬用の鳥 【中薬大辞典】から

| 鳥名 | 使用部位 | 生薬名 | 使用方法 | 効能・症状など |
|-----------------|------|--------------|-------------------------------|--------------------------|
| アカアシシギ | 肉 | 鷓肉(イツニク) | 煮て食べる。 | 体力増強・保温・胃弱 |
| ウズラ | 肉・全体 | 鷓鶒(アンジュン) | 煮て食べるか、煮汁を飲む。焼いて粉末にして飲む。 | 下痢・消化不良・疳の虫(子供の神経症) |
| オオタカ | 骨 | 鷹骨(ヨウコツ) | 焼いて粉末にし、酒で飲む。酒に浸して飲む。 | 骨折・リウマチ |
| | 嘴・爪 | 鷹嘴爪(ヨウシソウ) | 焼いて粉末にして飲む。 | 痔 |
| | 頭 | 鷹頭(ヨウトウ) | 焼いて粉末にして飲む。 | 痔・めまい |
| オオハクチョウ | 肉 | 鵠肉(コクニク) | 塩漬し、炙って食べる。 | 体力増強 |
| | 脂肪 | 鵠油(コクユ) | 冬に脂肪を煮て濾過し、塗布する。 | 腫れ物・耳垂れ |
| オシドリ | 肉 | 鴛鴦(エンオウ) | 煮て食べる。 | 痔・疥癬(かゆい皮膚病) |
| | | | 良く煮て、薄く切って貼る。 | 外傷・腫れ物 |
| カササギ | 肉 | 鵲(ジャク) | 煮て食べる。焼いて粉末にする。 | 尿結石・糖尿病・痰のつまり・鼻血 |
| カモメ類(ユリカモメなど) | 肉 | 鷗(オウ) | 炙って食べる。 | 口の渇き |
| カワセミ | 肉・全体 | 魚狗(ギョク) | 煮て食べるか、煮汁を飲む。焼いて粉末にして飲む。 | 喘息・骨が喉に刺さったとき |
| カワウ | 肉 | 鷓鶒肉(ロジニク) | 焼いて粉末にし、重湯といっしょに食べる。 | 保温・むくみ |
| | 骨 | 鷓鶒骨(ロジコツ) | 焼いて粉末にし、蜜と混ぜて綿で包んで飲み込む。 | 骨が喉に刺さったとき |
| | 唾液 | 鷓鶒涎(ロジセン) | 沸騰させたものを飲む。 | 百日咳 |
| ガン類(マガン・ヒシクイなど) | 肉 | 雁肉(ガンニク) | 煮て食べる。 | 髪や髭を伸ばす・体力増強・神経痛・半身不随 |
| | 脂肪 | 雁脂肪(ガンボウ) | 脂肪を煮て濾過し、塗布する。 | 腫れ物・耳垂れ |
| キジバト | 肉 | 斑鳩(ハンキウ) | 煮て食べる。 | 体力増強・眼病・喉のつかえ |
| クイナ | 肉 | 秧鶏(オウケイ) | 煮て食べる。 | リンパ腫 |
| コウノトリ | 肉 | 鶴肉(カンニク) | 煮て食べる。 | 女性の体力増強・喘息・熱がある時の筋肉痛 |
| | 骨 | 鶴骨(カンコツ) | 焼いて粉末にして飲む。煮汁を飲む。 | 肺結核・胸腹の痛み・喉のつかえ |
| コウライキジ | 肉・全体 | 雉(チ) | 煮るか蒸し焼きにして食べる。煮汁を飲む。 | 下痢・糖尿病・喘息・目の疲れ |
| コクマルガラス | 肉 | 慈烏(ジウ) | 炙って食べる。 | 体力増強・咳止め・微熱 |
| | 胆嚢 | 慈烏胆(ジウタン) | 胆汁を絞って点眼する。 | 結膜炎、白内障などの眼病 |
| コサギ | 肉 | 鷺肉(ロニク) | 炙って食べる。 | 体力増強・胃腸虚弱 |
| タンチョウ | 肉 | 鶴肉(カクニク) | 煮て食べる。 | 体力増強・糖尿病・蛇や虫の解毒 |
| | 骨 | 鶴骨(カクコツ) | 焼いて粉末にして飲む。 | 手足のしびれ・蛇や虫の解毒・骨が喉に刺さったとき |
| ドバト | 肉・全体 | 鳩(コウ) | 煮て食べる。 | 皮膚病・体力増強・めまい・ひきつけ |
| | 卵 | 鳩卵(コウラン) | 食べる。 | 皮膚病・天然痘 |
| トビ | 爪 | 鷹脚爪(エンキヤクソウ) | 1~2個を煎じるか粉末にする。 | 小児のひきつけ・めまい/痔に粉末を散布 |
| | 嘴 | 鷹嘴(エンシ) | 焼いて粉末にして飲む。 | 小児のひきつけ |
| | 翼の骨 | 鷹翅骨(エンシコツ) | 焼いて粉末にして飲む。 | 小児のいびきや咳 |
| | 胆嚢 | 鷹胆(エンタン) | 焙って乾かして粉末にし、湯で飲む。 | 心臓痛・胃痛 |
| | 脳髓 | 鷹脳髓(エンノウズイ) | 煎じて飲む。 | 頭痛 |
| ハイイロチュウヒ | 頭 | 鷓頭(シトウ) | 炙るか焼いて粉末にして飲む。 | めまい・ひきつけ・ヒステリー |
| マガモ | 肉 | 鳧肉(フニク) | 煮て食べる。 | 産後や病後の体力回復・食欲不振・むくみ・腫れ物 |
| | 羽毛 | 鳧羽(フウ) | 粉末にし、油で調べて塗る。 | 潰瘍・やけど |
| ミサゴ | 骨 | 鶺鴒骨(ガクコツ) | 焼いて酢につけ粉末にする。骨の折れたところにはさんで縛る。 | 骨折 |
| ヤツガシラ | 全体 | 屎咕吐(シココ) | 毛と腸を除いて炙り、粉末にして飲む。 | てんかん・精神病・マラリヤ |

他には『青鷺霜＝アオサギの黒焼き』を食中毒・神経痛・逆上症・女性の下腹部の痛みなどに、『鵲霜＝カササギの黒焼き』を利尿・便秘・痰がからむなどの症状に、『鷄冠霜＝ニワトリの‘とさか’の黒焼き』を夜尿症に用いるなどとかが伝えられています。(以上、西山英雄、漢方薬と民間薬、1975.)

【中葯大辞典】から

【中葯大辞典】を繰っていて馴染みのある鳥の名をみつ

け、興味から20種ほどを抜き出してみました(表、葯用の鳥—【中葯大辞典】から)。

表だけを見ると怪しげなものという印象を受けてしまいがちですが、これらは長い年月をかけて経験を重ね、伝承されて来たものの集積。辞典には葯材にするときの加工の仕方や効果的な使用方法、使ってはいけない体質、出典、成分なども詳しく記載されています。

試してみるなんてこともまずできませんが、少しでも先人の知恵を垣間見た思いです。

私の鳥見ライフ

札幌市西区 安 真一郎

この7月に幸運にもコウテンシの写真が北海道新聞に掲載され、北海道での単身赴任中に始めたバードウォッチングを、これまで続けてきて良かったと思えました。その写真は普通の銀鉛カメラではなくデジスコ(スコープにデジタルカメラを付けて撮る方法)で撮影したのですが、今回はバードウォッチングを始めたきっかけ、デジスコとの出会い、そして天売島での鳥見について書きます。

《鳥見のきっかけ》

私が始めて北海道の地を踏んだのは、単身赴任で札幌に来た1995年の4月でした。(その時から10年日記をつけ始めましたので、それを見返しながらこれを書いています)休日には趣味の旅行で道内各地の観光スポット、山、離島等を回り、きれいな花々や自然、エゾリスやナキウサギ等の小動物の写真を撮って楽しみ、カヌーの川下りでは美々川、歴舟川、釧路川というカヌーイスト憧れの川を堪能しておりました。1997年の春に、あるテレビ番組で、札幌の円山公園に10年ぶりで帰ってきたカワセミを紹介していました。翌週の土曜早朝に円山公園に行きましたが見る事ができず、6月8日に野幌森林公園の瑞穂の池でやっと見ることができました。カワセミを見た人の多くはバードウォッチャーになるという定説(?)の通り、そこから鳥の魅力にはまってしまい図鑑、望遠レンズ等を買揃え、1998年8月に東京に戻るまでの1年強を色々な鳥を求めて円山公園、野幌森林公園を中心に、北大構内、支笏湖、千歳川上流、鶴居村、知床、天売島等にも一人で回って鳥見と撮影を楽しんでおりました。

《デジスコ》

2001年4月に2度目の単身赴任で、また札幌に戻って来る幸運に恵まれました。2002年6月22日に一人で植苗駅からウトナイ湖にかけて鳥見に出かけました。美々川に近い

所まで来た時、上空からオオジシギがズピーヤク、ズピーヤクと鳴きながら急降下し、少し離れた歩道近くの木に降りて行きました。写真を撮ろうとその木に近づいて行ったところ、既に中年のご夫婦と女性1名の3名が観察しており、男性は三脚にスコープを取り付け、スコープの按眼レンズにデジタルカメラを付けて撮影をしておりました。私は自分の800ミリの銀鉛カメラで写真を撮った後で、その方に初めて見たデジスコの仕組み、メリットやデメリット等を色々お聞きし、その後一緒に鳥見を続けその方がカワラヒワ、ベニマシコ、オオジュリン等を撮影する様子を見ておりました。鳥にはその種類により近づいて欲しくない嫌な距離がありますが、それを気にせず鳴き声を聞き、双眼鏡で場所を確認し、スコープに入れデジタルカメラで撮影するという流れがとてもスムーズに行われておりましたが、その時は機会があればやってみようかなという程度の感想でした。

その1カ月後、インターネットで「野鳥」を検索し、出てきたホームページのいくつかの中に載っていた写真を見ていたところ、偶然私が撮ったオオジシギと同じ構図、同じ木の上にとまっている6月22日撮影の写真が出て来ました。見比べてところ私の写真は画面の中にオオジシギが小さく写っている風景写真に近いものでしたが、その写真は画面の1/3をオオジシギが占め、あの男性が写したものであることを確信致しましたが、こんなにはっきりと綺麗に写るのかとびっくりしました。2002年8月号の「バーダー」でデジスコ入門が特集されており、早速それを購入して研究し、デジカメやスコープのカタログも検討して、札幌駅前の量販店でスコープ、デジカメ、三脚を購入しました。

私のセットの場合、35ミリ判カメラレンズに換算しますと760~9,300ミリに相当しますが、低倍率では画面周囲に黒いケラレが生じ、高倍率ではブレが出やすいので主に2,000~3,000ミリ位で使っています。カラ類の様に動きの

早い鳥を撮るにはちょっと不向きですが、比較的じっとしている鳥を撮るには便利な道具です。そのデジスコを初めて使ったのは9月8日の野鳥愛護会の鶴川探鳥会でした。ムナグロ、ダイゼン、トビ等を撮りましたが、シャッターを押すときのブレが出て初めての撮影は芳しいものではありませんでした。スコープに鳥を入れ、デジカメをセットし、ピントを調整する時間を短縮し、シャッターを押す時にぶれない様に気をつけるという一連の動きには、やはり慣れるまでにかなり時間が必要でした。

尚、デジスコを紹介戴いた男性には2003年の6月22日にウトナイ湖の観察小屋で、ばったりと再会し、その節のお礼を述べ、一緒に楽しくシマアオジをデジスコで撮影致しました。

私の鳥見は、タンチョウやクマガラの様に一箇所に留まって撮影する一部の鳥を除き、基本的には森や林をウォーキングしながら鳥見を楽しみ、ついでに撮影するスタイルです。出かける時はリュックにスコープとデジカメ、動きの早い鳥の撮影用にもう1台のデジカメを入れ、三脚を持って行きますが持ち疲れしない様に軽い物で揃えています。

《天売島》

島の東部の遊歩道には「ノゴマの丘」、「ベニマシコ原野」、「アオジの林」、「クロツグミの森」、「ヒタキの谷」、「シロハラ原の森」、「キクイタダキの森」という具合に、比較的良く現れる鳥がそのエリアの名前に付けられています。中心部に作られている木道には春はウグイス、ノゴマ、ルリビタキ、コマドリ、カシラダカが大体いつも出迎えてくれます。また、島の西部はウトウの大繁殖地です。

観光船で島を一周すればケイマフリ、ウトウ、ウミガラス、ウミウ、ヒメウ等の海鳥と磯で昼寝をしているトドの姿を楽しむ事ができます。

今回コウテンシを見た天売島を初めて訪れたのは1998年6月13、14の両日です。13日の日暮れ時に島の西部のウトウ繁殖地に出向き、何十万羽ものウトウが囁に小魚を衝えて地面に降り立ち、自分の巣穴に素早く走りこむところを、よく巣穴を間違えないものだと感心しながら眺めましたが、この光景は一見の価値があると思います。現在はどうか確認しておりませんが、当時、ウトウ繁殖地に近い赤岩から約2キロ東には林道入口があり、野良猫がウトウの営巣地に行かない様に「通電中危険」の看板が掛かる電気柵が林道に沿って設けられておりました。14日の11時から民宿で借りた自転車を使い赤岩を見た後、1時頃からその林道に入りました。林道横の林にムシクイ類の群れやシマセンニュウを見ながら進んで行くと、右手にほぼ直角に曲がっている角に来ました。そこを曲がった直後、足元と言ってもよい位の2メートルと離れていない先の地面に、体全体が赤茶色で腰の一部が水色、赤い囁の鳥が背中を向けて何かを

ついでに撮るにはちょっと不向きですが、比較的じっとしている鳥を撮るには便利な道具です。そのデジスコを初めて使ったのは9月8日の野鳥愛護会の鶴川探鳥会でした。ムナグロ、ダイゼン、トビ等を撮りましたが、シャッターを押すときのブレが出て初めての撮影は芳しいものではありませんでした。スコープに鳥を入れ、デジカメをセットし、ピントを調整する時間を短縮し、シャッターを押す時にぶれない様に気をつけるという一連の動きには、やはり慣れるまでにかなり時間が必要でした。

尚、デジスコを紹介戴いた男性には2003年の6月22日にウトナイ湖の観察小屋で、ばったりと再会し、その節のお礼を述べ、一緒に楽しくシマアオジをデジスコで撮影致しました。

私の鳥見は、タンチョウやクマガラの様に一箇所に留まって撮影する一部の鳥を除き、基本的には森や林をウォーキングしながら鳥見を楽しみ、ついでに撮影するスタイルです。出かける時はリュックにスコープとデジカメ、動きの早い鳥の撮影用にもう1台のデジカメを入れ、三脚を持って行きますが持ち疲れしない様に軽い物で揃えています。

《天売島》

島の東部の遊歩道には「ノゴマの丘」、「ベニマシコ原野」、「アオジの林」、「クロツグミの森」、「ヒタキの谷」、「シロハラ原の森」、「キクイタダキの森」という具合に、比較的良く現れる鳥がそのエリアの名前に付けられています。中心部に作られている木道には春はウグイス、ノゴマ、ルリビタキ、コマドリ、カシラダカが大体いつも出迎えてくれます。また、島の西部はウトウの大繁殖地です。

観光船で島を一周すればケイマフリ、ウトウ、ウミガラス、ウミウ、ヒメウ等の海鳥と磯で昼寝をしているトドの姿を楽しむ事ができます。

今回コウテンシを見た天売島を初めて訪れたのは1998年6月13、14の両日です。13日の日暮れ時に島の西部のウトウ繁殖地に出向き、何十万羽ものウトウが囁に小魚を衝えて地面に降り立ち、自分の巣穴に素早く走りこむところを、よく巣穴を間違えないものだと感心しながら眺めましたが、この光景は一見の価値があると思います。現在はどうか確認しておりませんが、当時、ウトウ繁殖地に近い赤岩から約2キロ東には林道入口があり、野良猫がウトウの営巣地に行かない様に「通電中危険」の看板が掛かる電気柵が林道に沿って設けられておりました。14日の11時から民宿で借りた自転車を使い赤岩を見た後、1時頃からその林道に入りました。林道横の林にムシクイ類の群れやシマセンニュウを見ながら進んで行くと、右手にほぼ直角に曲がっている角に来ました。そこを曲がった直後、足元と言ってもよい位の2メートルと離れていない先の地面に、体全体が赤茶色で腰の一部が水色、赤い囁の鳥が背中を向けて何かを

ついでに撮るにはちょっと不向きですが、比較的じっとしている鳥を撮るには便利な道具です。そのデジスコを初めて使ったのは9月8日の野鳥愛護会の鶴川探鳥会でした。ムナグロ、ダイゼン、トビ等を撮りましたが、シャッターを押すときのブレが出て初めての撮影は芳しいものではありませんでした。スコープに鳥を入れ、デジカメをセットし、ピントを調整する時間を短縮し、シャッターを押す時にぶれない様に気をつけるという一連の動きには、やはり慣れるまでにかなり時間が必要でした。

2003年からは毎年5月の連休に天売島を訪れるようになりました。

2003年5月3日～5日には同島在住の写真家寺沢孝毅氏の主催する「とびつきり野鳥講座」で天売・焼尻島を回るツアーに参加して鳥見のポイントを回り、天売島ではヤマショウビン、ヤツガシラ、マミジロキビタキ、ヒメイソヒヨ、キマユホオジロ、シロハラホオジロ等々の思いもかけない珍鳥を見ることができるところを教えて戴きました。その説明の通り、4日の朝9時からの探鳥会では、パークゴルフ場の奥にシロハラクイナが現れました。窪地から姿を出しては隠れる動作をしていた為、私を含めて見学者全員が双眼鏡での観察に夢中になり誰も写真を撮っていませんでした。

2004年5月に訪れた時は、珍鳥は現れませんでした。

《コウテンシ》

2005年5月は3日～5日に訪問しました。4日の天候は午前中は曇り、昼から晴れに変わり最高気温約10度の鳥見には良い日でした。朝食前に一人で5時からパークゴルフ場から島の外周路を反時計回りに周りノゴマ、カシラダカ、ツグミ、コマドリ等を見て二股を左に曲がりアオジの林方面に向かいノゴマ、シロハラ、トラツグミ、アオジ、ルリビタキ等を確認できました。9時からまた鳥見に出ましたが、民宿を出た横の畑に初めて見るタイワンハクセキレイがいました。海岸沿いに西に進むとタキの谷に入るとベニマシコ、アリスイ、ルリビタキ、コマドリ、ノゴマ、イカルが次々に出てきてなかなか前に進めませんでした。墓地を通り中心部に抜け、木道を左に進むとアリスイ、コマドリ、キビタキが出てきました。小さなダムまで行きアカゲラ、アトリ等を見て、そこから戻る形でベニマシコ原野を通って外周路を2時間程歩き、パークゴルフ場に出ました。前浜地区で双眼鏡を持っている男性がいたので、「どこかで珍しい鳥が出なかったですか」と聞いたところ「巖島神社の近くで午前中にクビワコウテンシが出たらしいですよ」とのこと。既に午後3時半でしたが、初め

て聞く名前ですで行ってみました。そこは前日の午後4時半から6時まで観察をして、社殿前の敷地ではオオルリの番い、キビタキの番い、シロハラ、タヒバリ、イカル、ノゴマ等を見ることができた場所でした。

社殿を背に左側を見ると、民家の裏手に当たる場所に畑があり、双眼鏡で見ると一番奥に捨てた野菜屑でできた様な小山がありそこにツグミ、カシラダカと一緒にその鳥がいました。神奈川県の子供さんも加わり2人で観察をしました。その鳥は、ツグミより小さく、カシラダカより大きく、茶色の頭に白いベレー帽を載せた感じで、目の周りが白く、翼と背は白と茶色の混ざった感じで、のどから胸、腹は白く、首の付け根にははっきりと黒い帯が見えました。その時は「なるほどクビワがあるからクビワコウテンシか」と思っていました。その鳥は餌を探して小山の前や裏側を歩きまわり、暫くして地面に座り込みました。元気がなく疲れている様に見えました。距離は40メートルは離れていましたので写真を撮るには大変ピントが合わせづらく、3

時37分から5時の間に30枚程度写しましたがピントが合っていたのは半数位でした。新聞に掲載されたものは少しピントが甘いですが、赤い足が写っているのはこの1枚だけでした。じっとしている写真より、飛んでいる姿を思い起こさせる写真の方が良いとの理由で、新聞社の写真部の方がこの1枚を選んだとお聞きしました。

翌朝は雨でしたので早朝ウォッチングはせず、フェリーに乗る前の9時過ぎにまた神社に行ってみました。畑が耕されており人が入った為かコウテンシは残念ながら見ることができませんでした。ふと「一期一会」という言葉が浮かんで来ました。

北海道の単身赴任がいつまで続くか分かりませんが、できるだけ戸外に出て鳥と接する時間を作り鳥見を大いに楽しみたいと思っています。そして会社をリタイアする時が来れば、大好きな北海道にまたやってきたいと思っています。

— 新聞情報から —

帯広川にナキハクチョウ

北海道新聞2005年10月29日朝刊第1面(全道版)に、帯広市の帯広川にナキハクチョウが来ていることが写真付きで報道されました。ナキハクチョウはオオハクチョウよりもやや大きいハクチョウで、嘴が黒いのが特徴です。また、トランペッターズワンという英名の通り、プーツというラッパのような声で鳴きます。本来北米に分布し、あまり長距離の移動はしないのですが、何らかの理由で迷行してきたようです。日本全体でも記録は極めて少なく、北海道では1993年4月の美唄市および月形町での記録に次ぐ2例目です。ただ、1993年の記録は写真などの具体的証拠は残されていません。今回の記録は、明瞭な写真、独特な鳴声の確認などを伴うものとしては初めてのものです。

飛来場所は帯広川が札内川に合流するあたりで、毎年多数のオオハクチョウが越冬し、秋から翌春にかけて、カモ類などが多く見られるところです。飛来がわかったのは10月24日だそうです。新聞に報道されるよりも前に、複数の愛護会会員が現地に行き、観察・写真撮影などをしてきました。報道後にも何人かの会員が行きました。札幌から数時間かけて駆けつけた人も少なくなかったようです。

これらの人達の話によりますと、ナキハクチョウはオオハクチョウなどと共に水草を食べたり、時にはハクチョ

ウを見に来た現地の人達が与えるパン屑などを食べることもあったようです。

このナキハクチョウは、11月8日以降、帯広川では見られなくなったけれども、11月24日には十勝川温泉前の通称白鳥護岸で確認されたとの知らせが、愛護会会員で幕別町在住の越智仁司さんから届いています。帯広川か十勝川で越冬する可能性が強まっています。

広報部には何人もの人から写真がよせられましたが、ここでは、会員の佐藤幸典さん(岩見沢市)が撮影した写真を掲載します。

文責：広報部



ナキハクチョウ 帯広川 2005.10.26
佐藤幸典さん撮影



鶴川河口探鳥会

2005. 9. 4

鶴川町 藤谷 節子

数えきれない程通っているのに、行くたびにになにかおもしろいことに出会えるのが人工干潟までの道。9月4日の探鳥会では、エゾノキツネアザミ、タカアザミ、エゾノサワザミを教えてくださいました。花が上向きに咲く、下向きに咲く、葉の切り込みが深いと行きつ戻りつして確認しながら教えていただきました。ミチヤナギの小さな花をルーペで見せてもらうと、白い花の中のうすみどりがはっきり見えて、とても可愛い花でした。双眼鏡を逆さに使うとルーペと同じに見えることを知りおどろきでした。道の両側にはたくさんの外来種の花が咲き誇りこれからどうなるのかなと少々気になります。

干潟に近付くと、アオアシシギの鳴き声が聞こえ、スコープでその姿を見たときはすごく嬉しくなりました。ムナグロが2羽、長い間じっとたたずんで、その姿をじっくり観察出来ました。本を出し夏羽、冬羽のちがいを説明して下さりとてもわかりやすかったです。

この人工干潟で、クロツラヘラサギ、ダイサギ、コサギと一度に見れた夏、オジロワシ、オオワシ、ケアシノスリと一緒に見れた冬、陽が海に沈みほの暗い中をフワフワ飛ぶコミミズク。四季を通じて鳥たちがきて、多くの人たちに楽しんでもらえる場所であってほしいです。

いつもそばにいて教えて下さる人がいることは、鳥や花や自然を知ることが何倍も楽しくしてくれて、本当にすごいことで、感謝しています。ありがとうございました。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、オオタカ、ハヤブサ、マガモ、カルガモ、ムナグロ、アオアシシギ、イソシギ、キアシシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、コヨシキリ、ホオジロ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス
以上 27種

【担当幹事】成澤里美、樋口孝城

野幌森林公園探鳥会

2005. 9. 11

【記録された鳥】ウsp.、アオサギ、トビ、オシドリ、マガモ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヒヨドリ、

センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カケス、ハシブトガラス、ドバト

以上 24種

【担当幹事】島田芳郎、小堀煌治

野幌森林公園探鳥会

2005. 10. 2

【記録された鳥】トビ、タカsp.、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、キビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、カシラダカ、アオジ、イカル、カケス、ハシブトガラス
以上 24種

【参加者】阿部真実、岩村三枝子、大野信明、勝見輝夫・真知子、後藤義民、佐々木 裕、笹森繁明、品川睦生、高田征男、田中 洋・雅子・皇丞、徳田恵美・和美、戸津高保、富川 徹、松原寛直、村上トヨ、安 真一郎、山川美香、山口和夫、山本昌子
以上 23名

【担当幹事】富川 徹、山口和夫

宮島沼探鳥会

2005. 10. 9 札幌市北区 島田 芳郎

渡り鳥に逢いたくて、今年も宮島沼探鳥会に参加しました。

水面の奥に羽を休めるマガン達。やがて「キャハハン、キャハハン」と鳴き交わす一群が現れ、編隊飛行を解きながら次々と急下降して着水すると、周りからは歓声が上がりました。トップスピードのままヒラヒラと身をかわすかのように舞い降りるその様はとても印象的で、高度な飛行技術を見せつけているかのようです。

カリガネやシジュウカラガンはいないものかと、端から順にチェックしますがなかなか容易ではありません。眼がショボショボし始めた頃に、誰かがツルシギを見つけたようです。大体の居場所を教えてもらい、スコープで確認すると、なんと10羽が忙しく採餌中。頭を水に突っ込みお尻を上げると、赤い足も確認できます。その仕草はなんともユーモラスで可愛いのです。これを見ただけでも、今日は大満足です。

ところが今回は、更にオマケがありました。鳥合わせが終わり、解散しかけたそのときに、ハヤブサ(幼鳥)が至近距離の梢に止まっているのを見つけた人がいます。その距離わずか20m。参加者は大慌てでカメラを取り出して、探鳥会から一転して撮影会に変わりました。勿論、私も周りに冷やかされながらカメラ親父に変身です。

穏やかな秋の楽しい一日でした。

追記：探鳥会の冒頭に、小堀会長から故岡田代表幹事の訃報が伝えられました。温厚で優しくあった岡田さんと再び鳥見することが叶わなくなったことを思うと、名状しがたい悲しみに襲われます。これまでのご厚情に心から感謝し、ご冥福をお祈りします。

【記録された鳥】カイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、ミサゴ、トビ、ノスリ、ハヤブサ、シジュウカラガン、ヒシクイ、マガン、マガモ、コガモ、カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ツルシギ、アカゲラ、ヒバリ、モズ、シジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 31種

【参加者】赤沼礼子、石田典也、板田孝弘、岩崎孝博、川東保憲、後藤義民、小堀煌治、笹森繁明、佐藤幸典、佐藤ひろみ、品川睦生、島田芳郎・陽子、白鳥洋子、鈴木正之、鈴木泰子、高田征男、高橋良直、武田雄大、武田由里子、田中 洋・雅子、恒本英子、道場 優・信子、戸津高保・以知子、中嶋慶子、浪田良三・典子、成澤里美、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、樋口孝城、藤井亜生、堀 さち子、松原寛直、山口和夫、山田としえ、山田良造、横山加奈子

以上 42名

【担当幹事】佐藤幸典、佐藤ひろみ

野幌森林公園探鳥会

2005.10.16 江別市 牛込 直人

10月になって木々が紅葉し始め、まさに秋といった空気の中、野幌森林公園探鳥会に参加できました。前日は曇り空だったので、明日は大丈夫かなと不安な気持ちでした。しかし、当日起きてみるとこの上ない晴天だった。私の家から集合場所の大沢口までは自転車で20分くらいで、集合場所に向かう途中も心地良い空気を感じ、これから始まる探鳥会に胸を膨らませていました。私は今年の4月に関東から北海道に引っ越してきたので、野幌森林公園の野鳥や植物には初心者なのでこのような探鳥会はとてうれしい限りです。

集合場所にみんなが集まったら、幹事さんのあいさつを聞きさっそく森林に入ってしまった。森に入っていくとすぐハシブトガラやキバシリが出迎えてくれた。今の季節は木々の落葉の音が鳥たちが動いたように勘違いしてしまい、あちを見たりこっちを見たりととても忙しかった。私はこの一週間前にも森林公園を訪れたが、そのときよりも紅葉が進んでいて季節の移り変わりを実感できた。しばらくすると会員さんがヤマゲラを見つけてくれて、みんなが活気だってきた。関東出身の私としては関東のアオゲラとは少し違

うヤマゲラなどを目にするのはとてもうれしい。大沢園地で昼食を食べているとみんなが上を見上げてざわめき始めた。何かいるのかな? と思い私も食事を中断し見上げてみるとオオタカとハイタカが飛んでいた。

野鳥の他にエゾリスも観察できた。エゾリスは何やらキノコのようなものをむしゃむしゃ食べていた。そんな様子を見ているとこっちまでキノコが食べたくなってくる。普段はつつい野鳥に目がいってしまい足元の野草は見逃しがちであるが、愛護会の会員さん達の中には植物に詳しい方々もいてこれはチャンスといわんばかりに普段疑問に感じていたことを聞いて色々教えていただきました。

私にとっては今年が北海道で初めての冬なので乗り越えられるか不安である。森林公園にもどうやって入っていけば良いかわからないので、冬にもまた探鳥会に参加させていただきたいです。次回の探鳥会も楽しみにしています。

【記録された鳥】トビ、ハイタカ、オオタカ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、ウグイス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、イカル、カケス

以上 19種

【参加者】赤沼礼子、岩崎孝博、牛込直人、大久保寅彦、岡部良雄、後藤義民、品川睦生、高田征男、徳田恵美・和美、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、野坂英三、橋本翠柚、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、松原寛直・敏子、守下憲治、柳川 巖、山口和夫、横山加奈子 以上 25名

【担当幹事】早坂泰夫、山口和夫

野幌森林公園探鳥会

2005.11.6

【記録された鳥】トビ、コガモ、マガモ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、イカル、シメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 21種

【参加者】赤沼礼子、阿部 耐、阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、牛込直人、尾崎 脩、香川 稔、蒲澤鉄太郎、苅部栄一、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、佐々木哲夫、佐々木満智子、笹森繁明、品川睦生、大松洋子、田中 洋・雅子、田辺 至、恒本英子、道場 優・信子、戸津高保、中正憲信・弘子、信田洋子、橋爪陽子、橋本翠柚、畑 正輔、原 冴子、原 美保、広木朋子、藤井亜生、辺見敦子、堀 さち子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山口和夫、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上 45名

【担当幹事】岩崎孝博、道場 優



【小樽港】 2006年1月22日(日)

小樽港周辺で見られる海鳥などを観察する野鳥の会小樽支部と合同の探鳥会です。オオハム、ホオジロガモ、ウミスズメ、ケイマフリなどのほか、カモメ類や猛きん類も良く観察されます。日和山燈台付近、祝津

漁港、小樽埠頭などの各観察ポイントを貸切りバスで移動しながらの探鳥会です。なお、バスを利用しますので申込み制となります。

集合=午前9時30分 JR小樽駅待合室

申込先=白澤昌彦 011-563-5158

午後6時~8時までをお願いします。

締切り=1月15日(日)

参加費=1,500円程度

【野幌森林公園】 2006年2月5日(日)

冬の最も厳しい季節の中でカラ類やキツツキ類、キバシリなどの留鳥が活動しています。冬鳥のマヒワ、ハギマシコ、ウソなどと共に、フクロウも見られるかもしれません。

集合=午前9時 大沢口駐車場入口

交通=夕鉄バス(文京台西行)大沢口入り口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【円山公園】 2006年3月5日(日)

陽ざしに春が感じられる季節です。ツグミ、ウソ、アトリなどの冬鳥と共に、キクイタダキやカラ類などが見られるでしょう。午前中で解散の予定です。

集合=午前9時 円山公園管理事務所前

交通=地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】 2006年3月26日(日)

本州などで冬を過ごしたガン、カモ、ハクチョウ類がこの時期群れをなして北の繁殖地を目指し、渡りはじめます。ウトナイ湖はこれらの渡りの重要な中継地となっています。この他カモメ類やオオワシ、オジロワシ、アトリ、マヒワなども観察されます。

集合=午前9時30分 鳥獣保護センター前駐車場

交通=千歳空港発のバスがあります。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具をお持ち下さい。

☆何れの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせは

白澤昌彦 011-563-5158

鳥民だより

◆ 新年講演会のご案内

・日時 平成18年1月14日(土) 13:00~16:30

・場所 札幌エルプラザ内

札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

札幌市北区北8条西3丁目

(札幌駅から公共地下道で直結)

・演題 白神岬を渡る鳥たち

・講師 林 吉彦氏(渡島管内七飯町)

林氏は古くから鳥類標識調査者として野鳥調査に深く関わる一方、日本野鳥の会道南檜山支部長として社会的にも活躍中です。また愛護会会員でもあります。以下は林氏から寄せられた講演内容要旨です。

1) 北海道最南端「白神岬」を渡る鳥たち:津軽海峡を挟んで本州に向けて突き出ている岬は、白神岬の他、恵山岬、汐首岬、矢越岬がありますが、小鳥たちの多くは白神岬を渡りのコースとして選んでいる。その理由を推理する。また、南の越冬地を目指す秋の渡りは7月の末から始まるが、次々と変わる主役を紹介する。

2) 野鳥のくちばしが変だ:21世紀になってからくちばしに変形した鳥に出会うことが多くなったが、その姿をご覧いただく。

・野鳥写真映写

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。たくさんの方の作品の参加をお待ちしています。スライド映写およびデジタルカメラによる画像映写の両方ができます。デジタルカメラの場合は画像をJPEGで保存したCDをご持参下さい。ご不明のことがありましたら、高橋良直さん(BRB32264@nifty.com)にお尋ね下さい。

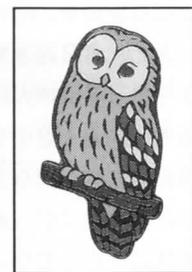
・会費 500円

◆ 野鳥写真展の作品を募集します

平成18年度も野鳥写真展を開催します。場所は光映堂フォトギャラリー(札幌市中央区大通西3丁目)で、5月の予定です。詳細は次号でお知らせします。

◆ バッジの販売

愛護会のバッジを作成、販売しています。フクロウをデザインしたもので、1個500円です。活動資金確保のためよろしくお願いします。バッジ代金と郵送料(2個まで80円、3個以上90円)に相当する額の切手を同封のうえ、下記に申し込みください。



☎063-0061 札幌市西区西町北13丁目2-3-108

蒲澤鉄太郎

◆ 住所変更のときは連絡を

会員の皆様に郵送した「野鳥だより」が宛先不明で戻ってくる場合があります。住所変更の場合には必ず連絡を下さい。

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>